

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：32633

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07112

研究課題名(和文)大人のADHDの当事者と医療者が一緒に活用できる「治療選択のための手引書」の開発

研究課題名(英文)Shared decision-making for adult ADHD

研究代表者

青木 裕見(AOKI, Yumi)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：40803630

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文):目的)大人のADHDを対象とした治療選択の手引き(Decision Aid,DA)を開発し、shared decision making(SDM)におけるその実行可能性を評価することを目的とした。方法)国際基準に則り、系統的にDAを開発した。フィールドテストでは、SDMの手法で今後の治療方針を決めた当事者への半構成的面接と自記式質問紙調査を実施した。結果)当事者は、ADHD診断後の新たな自己概念と今後の対処法について、自発的にDAを活用して関連情報を収集しながら熟考していた。結論)国際基準に則り開発した大人のADHDを対象としたDAについて、SDMにおけるその実行可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当事者中心の意思決定法として、当事者と医療者が一緒に今後の治療方針を決定する共同意思決定(shared decision making,SDM)が注目されているが、その具体的な展開方法はまだ確立されていない。本研究では、国際基準に則って系統的に大人のADHDを対象とした治療選択の手引き(Decision aid,DA)を開発し、SDMにおけるその実行可能性を確認した。当事者中心の医療の具体的な展開に貢献できたと言える。今後は、開発したDAの臨床普及のための取り組みや、本研究で培ったDA開発の知識とスキルをいかし、精神科領域における他の疾患への応用化をはかっていく予定である。

研究成果の概要(英文):Purpose: This study aimed to develop a decision aid (DA) for adults newly diagnosed with ADHD and to assess its feasibility during the shared decision-making (SDM) process. Methods: A DA was systematically developed using the International Patient Decision Aid Standards criteria. The process involved needs assessment for adults with ADHD, development of a DA prototype, revision of the prototype through the stakeholders' reviews, and field-testing of the DA. Results: The DA contained options of watchful waiting with own coping skills and pharmacological treatment, which consisted of several kinds of drug options. During the SDM process, participants overviewed the concepts of adult ADHD, utilized the DA, considered whether to share the information with others, examined coping strategies for ADHD symptoms, and deliberated on the medication treatment. Conclusion: The successfully developed DA could serve as a tool to facilitate the SDM process in clinical setting.

研究分野：精神看護

キーワード：shared decision making 共同意思決定 SDM decision aid ADHD 注意欠如・多動症

## 1. 研究開始当初の背景

これまで注意欠如・多動症 (**Attention Deficit Hyperactivity Disorder**, 以下 **ADHD**) は小児期に特有の疾患であり、成長とともにその症状は軽くなると考えられてきた。しかし近年、大人になっても不注意や多動・衝動の症状を持続させ、日常生活の自己管理ができない、仕事が長続きしない、周囲とトラブルになるなど、様々な困難を抱えている人がいることがわかってきた。大人の **ADHD** の有病率は **1.2 ~ 3%**との報告もある<sup>1,2)</sup>。精神的にも辛い状況となり、うつ病などの他の精神疾患を併発する人も多く、精神科医療において、大人の **ADHD** への対応が喫緊の課題となっている。臨床での動きとしては、米国精神医学会発行の「精神障害の診断と統計マニュアル第 5 版」(2013,邦訳 2014)において初めて、**17 歳以上の ADHD** の診断基準が整備された。また、診断後の対応としてわが国では、**2012 年**にアトモキセチンが、**2014 年**にメチルフェニデート徐放性製剤が、そして**2019 年**に Guanfacine が、それぞれ成人の **ADHD** の適応薬として承認された。こうした動きの一方で、診断後、薬の治療を導入するか否か、導入する場合はどの薬を使うか、さらに、心理教育などの精神療法と薬の治療をどのように組み合わせるかなど、具体的な介入方法については、ガイドラインなどもまだなく、医療者が各自手探りで対応しているのが現状で、有効な方法は確立されていない。

上述のように、大人の **ADHD** にも薬物療法の選択肢が存在するようになった。医療の選択肢に直面したとき、医師が単独で方針を決めて当事者に言い渡すのではなく、当事者も選択肢の特徴をよく理解して話し合いながら一緒に決める、共同意思決定 (シェアードデシジョン・メイキング, 以下 **SDM**) が注目されており、診療での対話が活発になる、疾患に関する知識が増す、治療の継続率が高くなるなどの効果があることもわかっている<sup>3)</sup>。さらに、共同意思決定の手法で方針を決める際に、治療の利点・欠点などの情報を盛り込んだ、治療選択のための手引書 (**Decision Aid**, 以下 **DA**) の活用が注目されており、欧米を中心に、様々な疾患について、冊子や **web** 版などの形態の **DA** の開発が盛んになっている<sup>4)</sup>。カナダの研究者らが中心となって、**DA** の国際機関も作られており、同機関によって、治療法の利点・欠点の双方を偏りなく説明しているか、わかりやすい言葉で説明しているか、最新の科学的根拠が示されているかなど、複数の項目からなる、**DA** に関する国際基準も設けられている<sup>5)</sup>。

当事者と医療者が一緒に今後の治療方針を決める **SDM** および、その促進のための **DA** の活用に注目があつまるなか、国内外、大人の **ADHD** を対象とした **DA** はまだない。

## 2. 研究の目的

本研究では、大人になって **ADHD** と診断された人と医療者が、一緒に活用できる **DA** を開発し、実際の **SDM** の場面でのその実行可能性を評価することを目的とした。

## 3. 研究の方法

**DA** の国際基準 **IPDASi**<sup>5)</sup> に則って、大人の **ADHD** を対象とした **DA** を開発した。開発過程は、(1) 当事者のニーズ・アセスメント、(2) **DA** の試案の作成、(3) 当事者・医療者による試案のレビュー、(4) **DA** 試案の修正、そして(5) **DA** のフィールド・テストから成り、フィールド・テストでは、**DA** を使って **SDM** の手法<sup>6,7)</sup>で医療者と治療方針を決めた当事者への半構成的面接と自記式質問紙から得られたデータをもとに、その実行可能性を評価した。面接から得られたデータは、修正型グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。自記式質問紙は、**SDM** 前後の **ADHD** に関する知識および意思決定の葛藤 (直後)、**ADHD** 症状 (**1 ~ 2 か月後**) について、**t** 検定を用いて比較した。本研究は聖路加国際大学の倫理委員会の承認を得て実施した (**18-A055**)。

## 4. 研究成果

### (1) 当事者のニーズ・アセスメント

予備調査として、大人になって **ADHD** と診断された人の体験を明らかにすることを目的に、**12 名**の当事者に半構成的面接を実施し、テーマ分析を行った。大人になって **ADHD** と診断された人の体験として、【否定する】【知ろうとする】【安堵する】【アイデンティティがゆらぐ】【対処しようとする】【受け入れる】の **6 つ**のカテゴリが抽出された。これまで抱えてきた困難や失敗の説明がついたようで【安堵する】と同時に、では果たして自分は何者かという【アイデンティティがゆらぐ】という経験をしていたのは、欧米の先行研究と共通していた。一方、診断直後の **ADHD** に対する否定的な受け止めは、本研究で新たに見いだされた。結果から、**ADHD** への否定的なとらえ方が軟化し、自己理解が深まるような関わりが重要であることが示唆された。さらに、自身の状態や治療に関する情報希求は高く、適切な情報提供を行い、本人が対処法や治療法についてよく検討できる仕組みづくりが必要であることもわかった。

### (2) **DA** の試案の作成

(1) の結果をふまえ、**DA** の国際基準 **IPDASi**<sup>5)</sup> に則って、大人の **ADHD** を対象とした **DA** の試案を作成した。**DA** の内容は、( ) 大人の **ADHD** について、( ) 対処法について、( ) 対処法に加えることのできる選択肢 (薬物療法を追加する・しない)、( ) 薬物療法を選択する場

合の選択肢（薬剤の選択肢）で構成された。

**(3) 当事者・医療者による試案のレビュー**

大人になって ADHD の診断を受け、外来通院中の 5 名および精神科医 5 名に試案を読んでもらい、フィードバックを得た。当事者からは、「リマインド」「プラセボ」「中枢神経系」などの言葉が難解であること、イラストや目立つ色は気が散るため使用しない方がいいことなどがあがった。精神科医からは、レイアウトや情報の伝達方法、補足情報などに関する意見があがった。

**(4) DA 試案の修正**

(3) のフィードバックをもとに DA 試案を修正して洗練させ、DA を完成させた。

**(5) DA のフィールド・テスト**

ADHD と診断された直後の 15 名が対象となった。SDM のプロセスにおいて、当事者は、ADHD 診断後の新たな自己概念と今後の対処法について、自発的に DA を活用して関連情報を収集しながら熟考していた。医師との治療方針の決定においては、疑問や自身の希望を述べ、意思決定に積極的に関与していた。さらに、知識および葛藤は、意思決定後、決定前に比べて有意に改善していた。一方で、ADHD 症状は前後で変化はみられなかった。

## 5. 結語

国際基準<sup>5)</sup>に則って系統的に開発した大人の ADHD を対象とした DA について、SDM におけるその実行可能性が示された。今後は、開発した DA の臨床普及のための取り組みや、精神科領域における他の疾患への応用化をはかっていく。

## 文献

- 1) Faraone, S.V., Biederman, J., & Mick, E. (2006). The age-dependent decline of attention deficit hyperactivity disorder: a meta-analysis of follow-up studies. *Psychological Medicine*, 37(9), 159-65.
- 2) Simon, V., Czobor, P., Bálint, S., Mészáros, A., I. Bitter, I. (2009). Prevalence and correlates of adult attention-deficit hyperactivity disorder: meta-analysis. *The British Journal of Psychiatry*, 194(4), 204-211.
- 3) Légaré, F., Adekpedjou, R., Stacey, D., Turcotte, S., Kryworuchko, J., Graham, I. D.,...& Donner Banzhoff, N. (2018). Interventions for increasing the use of shared decision making by healthcare professionals. *Cochrane Database Systematic Review*, 19, 7(7), CD006732.
- 4) Stacey, D., Légaré, F., Lewis, K., Barry, M. J., Bennett, C. L., Eden, ...& Trevena, L. (2017). Decision aids for people facing health treatment or screening decisions. *Cochrane Database Systematic Review*, 12, 4(4), CD001431.
- 5) Joseph-Williams, N., Newcombe, R., Politi, M., Durand, M. A., Sivell, S., Stacey, D., ...& Elwyn, G. (2014). Toward Minimum Standards for Certifying Patient Decision Aids: A Modified Delphi Consensus Process. *Medical Decision Making*, 34, 699-710.
- 6) Aoki, Y., Furuno, T., Watanabe, K., & Kayama, M. (2019). Psychiatric outpatients' experiences with shared decision-making: a qualitative descriptive study. *Journal of Communication in Healthcare*, 12, 102-111.
- 7) Aoki, Y., Takaesu, Y., Inoue, M., Furuno, T., Kobayashi, Y., Chiba, H.,...& Watanabe, K. (2019). Seven-day shared decision making for outpatients with first episode of mood disorders among university students: A randomized controlled trial. *Psychiatry Research*, 281, 112531.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青木 裕見, 渡邊 衡一郎	4. 巻 17(4)
2. 論文標題 精神科におけるシェアード・デシジョン・メイキング 多職種で取り組む決定のサポート	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神科臨床サービス	6. 最初と最後の頁 435-438
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 青木 裕見, 渡邊 衡一郎	4. 巻 31(5)
2. 論文標題 忙しい外来診療でshared decision-makingを取り入れるには ホームワーク式SDMの実践	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 443-449
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yumi Aoki, Takehiko Furuno, Koichiro Watanabe, Mami Kayama	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 Psychiatric outpatients' experiences with shared decision-making: a qualitative descriptive study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Communication in Healthcare	6. 最初と最後の頁 102-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1080/17538068.2019.1612212	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yumi Aoki, Yoshikazu Takaesu, Masato Inoue, Takehiko Furuno, Yasushi Kobayashi, Hiromi Chiba, Yasuhide Kakita, Masashi Hori, Hisateru Tachimori, Koichiro Watanabe	4. 巻 281
2. 論文標題 Seven-day shared decision making for outpatients with first episode of mood disorders among university students: A randomized controlled trial	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychiatry Research	6. 最初と最後の頁 112531
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1016/j.psychres.2019.112531	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木 裕見, 渡邊 衡一郎	4. 巻 10
2. 論文標題 うつ病治療におけるshared decision making (SDM) とリカバリーの支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Depression Strategy	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木 裕見, 渡邊 衡一郎	4. 巻 36
2. 論文標題 うつ病を対象とした shared decision-making の実践 “SDM7日間プログラム” を導入して見えてきたこと	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊 精神科	6. 最初と最後の頁 423-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木 裕見, 渡邊 衡一郎	4. 巻
2. 論文標題 重度精神疾患を対象としたShared Decision Makingの研究動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本社会精神医学会誌	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yumi Aoki; Takashi Tsuboi; Takehiko Furuno; Koichiro Watanabe; Mami Kayama	4. 巻
2. 論文標題 The experiences of receiving a diagnosis of attention deficit hyperactivity disorder during adulthood in Japan: a qualitative study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BMC psychiatry	6. 最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yumi Aoki	4. 巻
2. 論文標題 Shared decision making for adults with severe mental illness: a concept analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 青木裕見
2. 発表標題 大人になって注意欠如・多動症の診断を受けるという体験について
3. 学会等名 第38回日本社会精神医学会 口演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木裕見、坪井貴嗣、高江洲義和、古野毅彦、萱間真美、中山和弘、渡邊衡一郎
2. 発表標題 大人の ADHD の当事者と医療者が一緒に活用できる治療選択の手引き Decision Aid の開発
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会 口演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木裕見
2. 発表標題 気分障害を対象としたホームワーク式 Shared Decision-Making
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会 シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木裕見
2. 発表標題 不眠におけるShared Decision Making の実現可能性を探る - Shared Decision Making とは？
3. 学会等名 日本睡眠学会第44回定期学術集会 シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yumi Aoki, Takashi Tsuboi, Yoshikazu Takaesu, Takehiko Furuno, Mami Kayama, Kazuhiro Nakayama, Koichiro Watanabe
2. 発表標題 Development of a decision aid for adults newly diagnosed with attention-deficit hyperactivity disorder in Japan
3. 学会等名 10th International Shared Decision Making Conference
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考